社会に役立つ社会学

浅川達人

一　社会を紙に書く仕事

明治学院大学社会学部社会学科に着任した際、はじめに執筆を依頼された原稿は、「社会学とはどのような学問か」という問いに答えよ、というものであった。「社会学とは、社会学者の数だけ定義がある、雲を摑むような学問である」などといわれることも多い社会学について、真っ向から「お前の立場を明らかにせよ」と迫ってくる「明治学院大学社会学部社会学科」の伝統の分厚さに、一瞬たじろいだ覚えがある。

着任以来、この問に対して私は、「社会を紙に書く仕事」と答えることにしてきた。そして、「社会統計学」「数量データ分析」「現代コミュニティ論」など担当させていただいている授業の初回に、自ら学生に「社会学とはどのような学問か」と問うようにしてきた。ただし、この難問に対して、電子辞書を引いて得意顔で「社会学とは……」と答える学生がいるので、さらに条件を加えることにしている。「小学生にもわかる言葉で、十文字以内で説明せよ」。この指示により、電子辞書丸写し氏には、決して答えることができない問いとなる。この問い

に対して、これまで、私なりの回答としては、前述の通りに答えることにしてきたのだ。

目で見ることもできないし、直接、手で触ることもできない「社会」なるものを、紙に書くことなどできるのか。私の回答を前にして、講義に参加してくれた学生さんたちは一瞬、呆然とする。が、「とにかく、思いつくままに描いてごらんなさい」と促すと、しばらく後には、思い思いに、「社会」をノートに描いてくれるのだ。

棒人間をたくさん描き、そのひとりひとりを線で結ぶ、そんな絵を描く学生が、毎回必ずひとりはいる。そして、社会学とは「人と人との関係を描く」学問であると説明する。その通り、すばらしい回答だ。それだけではない。複数の棒人間を○や□で囲みカテゴライズし、それぞれの○や□を線で結ぶ学生も現れる。社会は「集団」によって構成されており、集団と集団の関係を考察するのも社会学だ。その通り、これもまた、すばらしい回答である。しばらくすると、紙面に棒人間以外が登場するようになる。学校、バイト先、病院、などの機関だ。その通り。人と機関の関係をも、社会学は考察の対象とするのだ。

このようにして、「社会を紙に書く仕事」が社会学である、という言説に、少しずつ賛同が得られるようになる。すると、次なる疑問が浮かぶ。「なぜ、紙に書く必要があるのか」。すなわち、自分が捉えている社会像を、なぜ、他者に提示する必要があるのか、という疑問である。これも、大変よい疑問である。自分が発見した「社会像」を自分の頭の中にだけ、とどめておいたらどうなるだろうか。その「社会像」が、他者にもそのように見えているのか、どうなのかがわからなくなるだろう。自分が発見した「社会像」が、他者からもそのように見えているかどうか確かめるためには、他者に提示することがぜひとも必要なのである。紙に書く、すなわち、他者に提示することが決定的に必要であるのは、このような理由からである。

と、従来、このような説明を、各授業の初回に繰り返してきた。この説明が間違っているとは、今も思わない。しかしながら、今後は、別の説明に切り替えたいと思い始めている。今後の私の回答を、「社会の役に立つ学問」（九文字）にしようかと、このところ、思い始めているのである。

二　地域活動との連携

「コミュニティ・アーキテクト・ラボ」という建築事務所を運営している八巻さんから電話がかかってきたのは、明治学院大学に着任して二年後の二〇〇八年春のことであった。建築家が、建物を設計し建設しさえすれば、建築の仕事が請け負える時代は終わった。これからは、建築を通してコミュニティをつくりあげていく仕事が必要だ。そのために、都市社会学者として協力してくれないか。このような要請であった。

はじめは、八巻さんらが参加している研究会に、講師として参加することを要請された。「社会学者はこれまで、社会関係や集団参加などソフトな部分に注目するものの、高層マンションなどの建物そのものには、きちんと目を向けてこなかった、このことを反省すべきだ」と、故中村八朗先生に、香港で行われた日本都市社会学会大会からの帰りの飛行機で諭されたこと思い出し、まずは、講師を引き受けることとした。

建築家の方々と議論しているうちに、都市社会学者としての私の発言が、あと一歩のところで、建築家の方々に届かない理由がわかった。私の発言は、確かに、興味をもって迎えられた（少なくとも、興味だけはもってもらえていたと思う）。でも、所詮は机上の空論にすぎないのではないか、というのである。建築家は、実際に建

物を造っている。それに対して、お前たち社会学者は、何か造ったのか、現実に作用したのか。リアリティと切り結ばない限り、きちんと聞く気にはなれない。もちろん、口に出して、そうは言わないものの、建築家の方々の顔は、明確にそう物語っていた。

二〇〇九年度が始まり、当時四年生と三年生であったゼミメンバーを中心に、八巻さんのコミュニティづくりの活動現場である、埼玉県比企郡・入間郡にわたる地域――ここを「ひきいる」地域と、我々は呼んでいる――での活動に、ゼミとして参加させていただくことにした。この「ひきいる」地域に、自給循環型ライフスタイルを基軸としたコミュニティを提案すること、これが八巻さんのコミュニティづくり、すなわち「ひきいるプロジェクト」の目標である。コミュニティづくりのためには、コミュニティの構成員が〈つながる〉ことが必要であり、コミュニティの外の人びとを巻き込むような〈つながり〉が必要である。そのような〈つながり〉を構築するために、都市社会学に、何かしらかの貢献ができるのではないか。そう考えたのである。

活動の初年度には、ひきいる地域の豊かな森林資源を活かすことが期待される、木質バイオマスペレットを燃料としたグリルで、バーベキューを行うというイベントから、協力を開始した。人と人の〈つながり〉を構築する一つの契機として、「食」を共にすること――一緒に準備して、ワイワイ楽しく食べて、額に汗して一緒に片付けること――は重要な契機になるはずだ。まずは、そこから開始することとした。

三　学外への情報発信

イベントが人と人との〈つながり〉の契機になり得る。それはその通りであった。しかしながら、「契機」となり得るのみで、〈つながり〉を持続させる効果は、どうやら薄いことが、数回のイベントに協力し、参加した経験からわかってきた。そこで、二〇一〇年度からは、新しい試みをスタートさせた。情報発信が、それである。

イベントに参加する方々は、イベント当日に参集するのみであり、そのイベントにどのような意味を込め、どのような仕掛けを準備してきたのかを、一般的には知らない。すると、参加しました、楽しめました、さようなら、で終わってしまう。コミュニティづくりに資するイベントとして、我々がどのような仕掛けを用意し、意味付与をしてきたのか。それを、イベント参加者に伝えることができないか。そのための試みとして、「浅川ゼミブログ」を二〇一〇年六月に開設することとした。[1]

二〇〇八年九月には、浅川研究室のウェブサイトを開設し、浅川の言葉での情報発信は試みていた。[2] 残念ながら、教員が開設するウェブサイトの情報だけでは、足りなかったのである。実際にイベントを運営する学生自身が、自分の言葉で、情報発信する。そのことによって、活動に対する学生のモチベーションがあがり、そうした学生の言葉だからこそ、イベント参加者に伝わるのではないか。そう考えたのである。

このブログには、ゼミ生が悩んだこと、試行錯誤を繰り返したことを、ゼミ生の言葉で書き込んでもらうこととした。したがって、基本的には浅川が書き込みを統制せず、自由に書き込んでもらうこととしている。まずは、

七月二十四・二十五日に行われた、小川町の七夕祭り用の七夕飾り作成の様子から、ブログを通して発信することとした。

和紙の産地として有名な小川町の、伝統行事の一つである七夕祭り。有機野菜レストラン「わらしべ」さんの軒をお借りして、浅川ゼミメンバーが、ひとり一枚の和紙を用いて作成した七夕飾りを飾り付け、地域の祭りである七夕祭りを盛り上げることが、目的のひとつであった。地域の方が作成した飾り付けを、飾り付ける「手伝い」をするだけではなく、デザインコンセプトを考えることから主体的に参加させていただき、「我々みんなの祭り」として盛り上げることを試みたのである。参加してくれたゼミ生たちが、悩みながらも、試行錯誤しながらゼミ飾りを作成する過程が、ブログに記載された。掲載された記事に対して、八巻さんや、小川町で「生活工房・つばさ・游」というＮＰＯを運営している高橋さんが、コメントを残してくださる。それを励みに、作成とブログ更新に、ゼミ生が挑む。小川町と浅川研究室との、インターラクションがこのようにして開始された。

七夕祭りが終わった現在は、ひきいるプロジェクトの活動拠点となることを目指して、現在建築が進んでいる「ひきいるハウス」の建前（上棟式）のコラボレーションの過程を、引き続きブログに掲載している。今回は、ツイッターとの連携型のブログを用いることにより、「つぶやき」と「記事」を並行して掲載できるよう工夫した。この原稿を執筆している一〇月現在、小川町を含むひきいる地域の方々が、ゼミ生のつぶやきをフォローしはじめてくださっている。きっと、ブログの記事にも、コメントを寄せてくださるだろうと期待している。

四　社会に役立つ社会学

「社会を紙に書く仕事」から「社会の役に立つ学問」へ。私の中で、私にとっての社会学の定義が、変化しつつある。ひきいるプロジェクトが、どの程度、ひきいる地域の方々の生活に資する活動となり得るかどうか、いまのところ何ともいえない。明治学院大学という、ひきいる地域から遠く離れた異空間での机上の空論に終わってしまう可能性も、ゼロではない。

だが、ひとつだけ確かに言えることは、ウェブサイト、ブログ、ツイッターという三つのチャンネルを通して、学外と〈つながる〉ことを試みていることから、ひきいる地域の住民の方を含む多くの方々から、さまざまなアイディアをいただくことが可能であり、それがゼミ活動にとってアドバンテージになるであろう、ということである。明治学院大学における学内の学びと、学外からの声が、我々のゼミ活動を、地域で暮らす方々の生活に資する活動となるよう、ナビゲートしてくれることだろう。浅川ゼミの活動が、「社会に役立つ社会学」につながっていくことができるように、今後とも努めていきたい。

注

（1）浅川ゼミ２０１０ブログ…http://asasemi2010.blog76.fc2.com/

（2）浅川達人研究室ウェブサイト…http://www.meijigakuin.ac.jp/~asakawa/